

乳幼児を育てる母親の学習スタイルを規定する要因

田井 優子
(八洲学園大学)

1. 本論文の目的

本論文は乳幼児を育てる母親の学習スタイルを規定する要因の一端を明らかにすることを目的としている。このような要因解明は、乳幼児を育てる母親が容易に学習活動に取り組めるような支援を検討する研究の一環に位置づくものである。

現在のわが国においては、乳幼児を育てる母親が自宅外で趣味的な学習に取り組んだり、子どもをあずけて学習をしたりすることは容易ではないだろう。女性自身の意識をみても、国立社会保障・人口問題研究所が1999（平成11）年に実施した「全国家庭動向調査」によると、「自分たちのことを多少犠牲にしても、子どものことを優先すべきだ」という意見について既婚女性の7割近くが賛成している⁽¹⁾。同調査では「結婚後は、夫は外で働き、妻は主婦業に専念すべきだ」という意見や「子どもが小さいうちは母親は仕事を持たずに育児に専念した方がよい」という意見に賛成する既婚女性の割合も高くなっている。内閣府国民生活局の「国民生活選好度調査」（2001（平成13）年度版）では「子どもの保育は誰が担うのが望ましいと思うか」を調査した結果、「子どもの母親」と答えた男女の比率は95.7パーセントを占めており、家族や親族以外（たとえば、保育所や託児ルーム）などの比率は小さかった⁽²⁾。小さな子どもを持つ親や母親のあるべき姿として当事者を含めた多くの人々

がこのように考えている現状では、乳幼児を育てる母親は子育てが一段落するまで学習活動を中断したり、後ろめたさを感じながら学習活動を続けることになると思われる。

しかし、学習をしたいと思っている育児中の母親は多いので、そのような母親が容易に学習活動に取り組めるような支援について検討を行う必要があるが、そのような検討は緒に就いたばかりであり、理論的にも実証的にもまだ十分とは言い難い状況にある。

そのような学習支援のあり方を探るこれまでの研究経過を述べると、まず、周囲の協力に対する母親の認識（以下、周囲の協力関係）が乳幼児を育てる母親の学習活動の有無に影響を及ぼす要因である可能性があることがわかってきた⁽³⁾。しかし、周囲の協力関係が欠如している条件の下で学習活動が行われている事例や、逆に周囲の協力関係が存在している条件の下でも学習活動が行われていない事例もみられた⁽⁴⁾。そのため、母親の学習に対する考え方（以下、学習意識）も取り上げ⁽⁵⁾、周囲の協力関係とあわせて母親の学習活動に影響を及ぼす要因の検討を行ってきた⁽⁶⁾。しかし、それらだけでは母親の学習活動の有無を説明するには十分ではなく、さらに検討を続ける余地が残されている⁽⁷⁾。

また学習活動といってもさまざまなスタイルがあり、学習の質を高める学習スタイルにも着目する必要があるだろう。単発的な学習もあるが、学習の質を考えると、むしろ継続的に学習活動に取り組んでいるかどうかが問題になる。しかも、乳幼児を育てる母親の場合には、その乳幼児との関わりもみる必要があるように思われる。学習の質を高めるためには、できれば学習中は子どもをはずけ、一時的にでも子育てから解放された方が望ましいに違いない。そのような母親の学習スタイルの検討も未だなされていないというのが現状である。

そこで、本論文では、母親の学習活動を学習スタイルの側面から捉え、その特定の学習スタイルの出現を規定する要因を解明することにしたいと思う。その際の説明変数としては、これまで取り上げてきた周囲の協力関係と学習意識を取り上げることができると思われるので、そのところから検討を行うことにする。また、学習意識についてはこれまで取り上げた意識とは異なるものを取り上げることにしたので、学習活動の有無を規定する要因の分析も

あわせて行うことにしたいと思う。

2. 研究方法

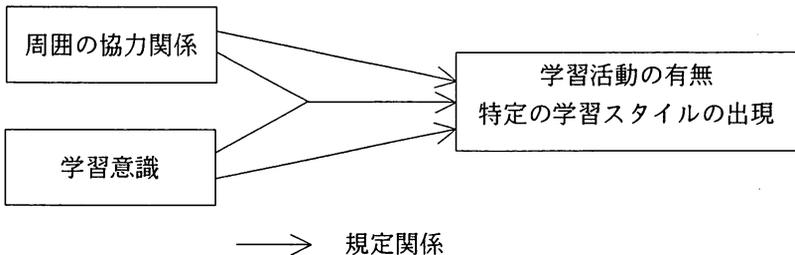
本論文の目的は乳幼児を育てる母親の学習スタイルを規定する要因の一端を解明することであるが、そのような要因解明のために、ここでは分析の対象となる事象をどのように捉え、それをどのような方法を用いて検討するかを明らかにしておくことにしたい。

(1) 分析の視点

1. 本論文の目的で述べた課題を検討するため、本論文では従来の分析枠組⁽⁸⁾に今回検討する変数を組み入れた枠組(図1)で分析を行うことにした。

図1は、「周囲の協力関係」と「学習意識」およびそれらの組み合わせを「学習活動の有無」及び「特定の学習スタイルの出現」を規定する要因として取り上げ、検討することを表している。

図1 分析枠組



(2) 分析の方法

本論文では、乳幼児を育てる母親の学習スタイルを規定する要因を分析する際の方法として、ブール代数アプローチ⁽⁹⁾を用いる。このアプローチを用いる理由は、取り上げられている変数のあらゆる組合せを容易に検討できる

からである⁽¹⁰⁾。ブール代数アプローチでは「たがいに異なる原因それぞれが別々に同じ結果をもたらす多元因果」⁽¹¹⁾や「複数の原因条件が重なってはじめてある社会現象の生起に影響を及ぼすという、原因条件間の交互作用 (= 結合因果)」⁽¹²⁾のあらゆる可能性を検討することを前提としており、実際の分析でもそれが容易に分析できるようになっているが、統計的手法ではこのような多元因果や結合因果を分析することはほとんど不可能だとされている⁽¹³⁾。したがって、先に述べた課題を検討するための方法としては、統計的手法よりブール代数アプローチを用いる方が適当であると思われる。

なお、分析にあたっては、事例として茨城県つくば市を取り上げ、質問紙調査を行った⁽¹⁴⁾。調査の概要は第1表の通りである。

第1表 調査の概要

- ① 調査対象：茨城県つくば市に在住の乳幼児を育てる母親
- ② 調査方法：1歳6か月検診および3歳検診のためにつくば市内の保健センター（全6ヶ所）に来所した母親に対して調査票を配布した（配布総数は419）。回収は郵送による。
- ③ 調査実施期間：2005（平成17）年8月2日～9月15日
- ④ 回収状況：回収数（率）101（24.1パーセント）
有効回収数（率）101（24.1パーセント）
- ⑤ 調査内容：学習活動の有無，学習スタイル，周囲の協力関係，学習意識，属性など

3. ブール代数アプローチによる分析

(1) データと変数

ここで使用するデータは、つくば市において収集したデータのうち、周囲の協力関係、学習意識、学習スタイル、学習活動の有無に関する部分である。具体的な検討に先立ち、以下では分析で用いる変数について検討を加えておくことにしたい。

1) 説明変数：周囲の協力関係

周囲の協力関係についてはこれまで用いてきた観点をを用いることにするが、それらについては先行研究で説明されているので⁽¹⁵⁾、ここでは簡単に述べるにとどめることとする。

ここでいう協力は、乳幼児を育てる母親（以下、母親）の学習活動に対する助けや支えのことである⁽¹⁶⁾。周囲とは母親をとりまく人々・組織・機関等のことで、これまでの研究では「夫・パートナー」「家族・親族」「友人・知人」「その他の援助者」「社会」の5種類について検討が行われてきている⁽¹⁷⁾。協力関係の存在は、母親自身の認識に基づくものとする⁽¹⁸⁾。

2) 説明変数：学習意識

今回の分析では、学習意識に関する変数として、先行研究⁽¹⁹⁾や聞き取り調査⁽²⁰⁾の結果から母親の学習活動の有無に影響を及ぼす可能性がみられている次の2つの変数を取り出して検討を行うことにする。

学習意識①：「周囲に負担をかけないように学習すべきである」に対する意見

学習意識②：「子どもが小さいうちは、学習よりも子育てを優先すべきである」に対する意見

3) 従属変数：特定の学習スタイルの出現

学習の方法、手段、形態など学習の進め方に関することから、ここでは学習スタイルと呼ぶことにする。学習スタイルを捉える視点としては、教材・教具の種類、学習集団の規模、グループ学習の進め方、指導者の有無、施設利用の有無などが考えられる。今回の分析では、上述したように乳幼児を育てる母親の学習の質を高める学習スタイルとして、次の2つの変数を検討する。

学習スタイル①：定期的に時間をとって学習していたか

学習スタイル②：学習中、子どもをはずけたことがあるか

学習スタイルに関する変数については、いずれもこの1年間に行った個々の学習について調査を行った。今回の調査では、学習者にこの1年間に行った学習活動の内容を具体的に3つまであげてもらい、それぞれについて学習スタイルを回答してもらった。

4) 従属変数：学習活動の有無

学習活動の有無は、この1年間に学習を行ったかどうかで捉えた。ここでいう学習は、講座・教室に参加したり、展覧会、演奏会、講演会などに行ったりするだけでなく、先生やコーチについたり、本を読んだり、テレビやラジオを見たり聞いたりして学んだことを含んでいる。

本論文の目的は特定の学習スタイルの出現を規定する要因の解明であるが、先述の通り、それは母親の学習活動に対する支援のあり方を探るための検討として行っているものであり、学習スタイルの出現を規定する要因を分析する際の基礎データを得る必要もある。そのため、本論文でもまず学習活動の有無についても見ておくことにしたい。

以上が今回の分析で用いる変数である。以下ではこれらの変数間の関係を検討するが、具体的には次の2点について検討を行った。

分析項目①：協力主体の種類数⁽²¹⁾および学習意識と学習活動の有無の関係

分析項目②：協力主体の種類数および学習意識と特定の学習スタイルの出現の関係

(2) 真理値の与え方

ブール代数アプローチは事例データを対象とした質的な比較分析を行う手法である。このアプローチでは、事例を比較する際に、ある条件が存在するか否かという2値的なカテゴリーに着目し、各変数の条件が存在する場合に真理値1を与え、他方、条件が存在しない(欠如している)場合、真理値0を与える。⁽²²⁾

今回の検討においては、上述の各変数に次のように真理値を与えることに

する。

変数A：周囲の協力関係

協力主体の種類数が2以上：1 / 協力主体の種類数が1以下：0

変数B：学習意識①（「育児中の母親も学習すべきである」に対する意見）

「そう思う」または「ややそう思う」⁽²³⁾：1 / 上記の回答以外：0

変数C：学習意識②（「子どもが小さいうちは、学習よりも子育てを優先すべきである」に対する意見）

「そう思う」または「ややそう思う」：1 / 上記の回答以外：0

変数Y1：学習活動の有無（この1年間に学習を行ったか）

していない：1 / していた：0

変数Y2：学習スタイル①（定期的に時間をとって学習していたか）

していない：1 / していた：0

変数Y3：学習スタイル②（学習中、子どもをあずけたことがあるか）

あずけたことがない：1 / あずけたことがある：0

(3) 真理表の検討および計算結果

ブール代数アプローチでは検討する説明変数の真理値（1, 0）のすべての組合せについて、その条件に該当する事例で結果現象がみられるかどうか、つまり従属変数がどのような真理値をとるのかを手がかりとして、説明変数と従属変数の間の関係を明らかにしようとしている。上述の分析項目①および②について検討した結果、次の3点が明らかとなった。

1) 学習活動の有無について

第3表は、学習活動の有無に関連するデータをもとに作成した真理表である⁽²⁴⁾。ここでの従属変数の真理値の決め方について説明しておく、各行の「事例数」⁽²⁵⁾を母数とした「学習活動を行っていない事例数」の比率が50.0パーセント以上の場合、従属変数に真理値1を与え、50.0パーセントに満たない場合は真理値0としている⁽²⁶⁾。

第3表 学習活動の有無に関する真理表

説明変数			従属変数	学習活動を行って いない事例数	事例数
A	B	C	Y1		
1	1	1	1	12 (50.0)	24
1	1	0	0	2 (16.7)	12
1	0	1	1	1 (50.0)	2
1	0	0	1	1 (50.0)	2
0	1	1	0	9 (42.9)	21
0	1	0	0	9 (40.9)	22
0	0	1	1	6 (85.7)	7
0	0	0	1	6 (54.5)	11

変数A：周囲の協力関係

変数B：学習意識①

変数C：学習意識②

変数Y1：学習活動の有無

第3表で示された従属変数Y1が真理値1をとる(学習活動を行っていない事例数が半数以上である)各行の変数間の関係をブール代数の式で表せば、

$$Y1 = ABC + AbC + Abc + abc + aBc + abc$$

となる⁽²⁷⁾。これは従属変数Y1が真理値1をとるのはABC, AbC, Abc, aBc, abcのいずれかの場合であることを意味している。この式を縮約⁽²⁸⁾すると(i)式が得られる。

$$Y1 = b + AC \quad \dots (i)$$

(i)式は、b(母親が「育児中の母親も学習すべきである」と考えていない)、あるいはAC(協力主体の種類数が2以上で、かつ母親が「周囲に負担をかけないように学習すべきである」と考えている)という条件のもとで、Y1(半数以上の人々が学習活動を行っていない)という結果現象がもたらされたことを示している。

2) 学習スタイル① (定期的に時間をとって学習していたか) について

第4表は、学習活動を行っていた人が定期的に時間をとって学習していたかどうかについての真理表である。従属変数の真理値は、各行の「定期的に時間をとって学習していない事例数」⁽²⁹⁾が1以上の場合、従属変数の真理値を1とすることにした⁽³⁰⁾。

第4表 学習スタイル① (定期的に時間をとって学習していたか) に関する真理表

説明変数		従属変数	定期的に時間をとって 学習していない事例数
A	C	Y2	
1	1	1	2
1	0	0	0
0	1	0	0
0	0	1	1

変数A：周囲の協力関係 変数C：学習意識②

変数Y2：学習スタイル①

これについて各行の変数間関係をブール代数の式で表したのが次の(ii)式である。

$$Y2 = AC + ac \quad \dots (ii)$$

(ii)式は、AC(協力主体の種類数が2以上、かつ「周囲に負担をかけないように学習すべきである」と考えている)、あるいはac(協力主体の種類数が1以下、かつ「周囲に負担をかけないように学習すべきである」と考えてはいる)という条件のもとで、Y2(学習活動を行っていた人のうち定期的に時間をとって学習していない事例)の存在が認められたことを意味している。

3) 学習スタイル② (学習中、子どもを気づけたことがあるか) について

学習活動を行っていた人のうち子どもを気づけたことがない事例⁽³¹⁾(Y3)

については、第5表のような真理表が得られた。従属変数の値は、学習中、子どもをあずけたことがない事例数が1以上の場合、従属変数の真理値を1とすることにした⁽³²⁾。

第5表 学習スタイル②(学習中、子どもをあずけたことがあるか)に関する真理表

説明変数		従属変数	学習中、子どもをあずけたことがない事例数
A	C	Y3	
1	1	1	2
1	0	0	0
0	1	1	2
0	0	1	1

変数A：周囲の協力関係 変数C：学習意識②

変数Y3：学習スタイル②

これをブール代数の式で表したのが次の式である。

$$Y3 = AC + aC + ac$$

さらにこれを縮約すると次の(iii)式が得られる。

$$Y3 = a + C \quad \dots (iii)$$

(iii)式については、a(協力主体の種類数が1以下)あるいはC(「周囲に負担をかけないように学習すべきである」と考えている)という条件に該当する事例で、Y3(学習活動を行っていた人のうち、学習中、子どもをあずけたことがない事例)がみられたことを示している。

4. 考察

ブール代数アプローチによる検討の結果、従属変数Y1, Y2, Y3のいずれについても、結果現象を引き起こす要因は単一ではなく複数ある可能性がみられた。また、Y1, Y2については+で表される多元因果に加えて結合因果が析出された。以上のことについて、若干の考察を加えておくことにしたい。

分析項目①については、「育児中の母親も学習すべきである」と考えていない人の場合、その半数以上が学習活動を行っていないとしてもそれは当然であると言えるであろう。一方、母親が学習しようとするときに、協力主体の種類数が複数あっても、同時に母親自身が「周囲に負担をかけないように学習すべきである」と考えている場合には、学習に取り組みにくい状況にあると解釈できるように思われる。

次に分析項目②についてであるが、母親が学習していても、協力主体の種類数と「周囲に負担をかけないように学習すべきである」といった母親の意識の組み合わせの条件によっては定期的な学習が、またそれらのうちの一方の条件のもとでは子育てから一時的に解放されての学習が難しくなるようである。そのような条件を生じさせないようにする支援方策を探れば、母親は一層学習しやすくなり、学習の質を高めることが可能なると思われる。

今回の調査では、「よりよい生活をおくるためにしたいこと」についても自由記述で調べている。分析項目②をさらに補充するために、その自由記述のうち、学習スタイルおよび学習意識についての意見をみると⁽³³⁾、以下の点が指摘できるように思われる。

まず、学習スタイルのうち定期的に時間をとって学習していたかについては、学習活動を行っていた人のうち定期的に時間をとって学習していない人たちの回答（自由記述）には、

- ・ 子どもをあずけて学習したいが、あずけるところがない。
- ・ 学習するためにお金を払ってまで子どもをあずけたいとは思わない。
- ・ 子どもとの時間を大切にしたい。
- ・ 生活が子ども中心にならざるを得ない。

などの意見がみられる。

また、学習中に子どもをあずけることに関連して、現段階では子どもをあずけることなく学習に取り組んでいる母親から次のような回答があった。

- ・ 学びたいことはあっても、周囲の理解がまだ得られないのではないかと不安がある。
- ・ 地域から「母は仕事はせず、何も習い事はしてはならない」という考え方を押しつけられている。もう少し時代にあった考え方が広まるといい。

ブール代数アプローチによる分析結果およびこれらの自由記述から、子育て中の母親の学習の質を高めるためには、子育てに協力してくれる支援ネットワークをつくったり、託児施設や一時保育を充実させたり、経済的負担がかからないように配慮したりするほか、周囲の雰囲気や考え方の影響も大きいようなので子育て中の母親が学習することの意義を社会全体にもっと啓発する必要もあるように思われる。

5. 今後の課題

つくば市で実施した調査の残されたデータ分析に限っていえば、今回のブール代数アプローチでの分析には用いなかった自由記述の回答を分析し、乳幼児を育てる母親の学習スタイルに影響を及ぼす可能性のある変数を取り出すことが課題として残されている。さらに、それと関連して、小さな子どもを育てながら学習に取り組む母親の手記などの分析も行い、そのような変数を取り出すことにしたい。

<注>

- (1) 調査対象は全国のすべての世帯の有配偶女子で、分析対象票は7578であった。
- (2) 調査対象は全国に居住する15歳以上80歳未満の男女で、有効回収数(率)は3988(79.8パーセント)であった。
- (3) 田井優子「乳幼児を育てる母親の学習行動に周囲の協力関係が及ぼす影響」(『日本生涯教育学会論集』第25号, 2004(平成16)年, 29-38頁)

- (4) 前掲「乳幼児を育てる母親の学習行動に周囲の協力関係が及ぼす影響」を参照。
- (5) 前掲「乳幼児を育てる母親の学習行動に周囲の協力関係が及ぼす影響」を参照。
本検討を行うために実施した調査の結果から、母親の学習意識も学習活動の有無に影響を及ぼす要因である可能性がみられた。しかし、ここでは母親の学習活動の有無に対する周囲の協力関係の影響を明らかにすることに焦点があてられ、学習意識の影響までは十分に検討されていない。そのため、周囲の協力関係だけでなく、学習意識も変数として検討する必要が出てきたのである。
- (6) 田井優子「乳幼児を育てる母親の学習活動の有無に影響を及ぼす学習意識」(『日本生涯教育学会論集』第26号, 2005(平成17)年, 41-48頁)を参照。検討の結果、周囲の協力関係と学習意識(具体的には、学習機会にかかわる考え方)が学習活動の有無に影響を及ぼす要因である可能性が明らかとなった。
- (7) 前掲「乳幼児を育てる母親の学習活動の有無に影響を及ぼす学習意識」を参照。
本検討を行うために実施した調査では、被調査者の学習活動率(88.9パーセント)は全国の女性の学習活動率(45.3パーセント(調査時))と比べかなり高く、また学習希望率と学習活動率に完全な相関がみられた。その理由として、本検討が比較的明確な学習意識を持ちながら学習活動に取り組んでいる可能性の高いボランティア・グループの運営スタッフに面接調査を行った事例研究であったことが指摘されている。この点について、ここでは「今後は乳幼児を育てる母親に対する統計的な調査で先の仮説を検証する必要がある」と述べられている。
- (8) 前掲「乳幼児を育てる母親の学習行動に周囲の協力関係が及ぼす影響」32頁
- (9) ブール代数アプローチについては、鹿又伸夫編『ブール代数アプローチによる質的比較』(平成8~9年度科学研究費補助金研究成果報告書, 1998(平成10)年), 鹿又伸夫・野宮大志郎・長谷川計二編『質的比較分析』(ミネルヴァ書房, 2001(平成13)年)を参照。
- (10) 先行研究でもこのような理由からブール代数アプローチを用いた検討が行われている(前掲「乳幼児を育てる母親の学習活動の有無に影響を及ぼす学習意識」等を参照)。
- (11) 前掲『質的比較分析』7頁。
- (12) 前掲『質的比較分析』48頁。
- (13) 前掲『質的比較分析』8頁。
- (14) 詳しくは<資料1>を参照。
- (15) 前掲「乳幼児を育てる母親の学習活動の有無に影響を及ぼす学習意識」等を参照。

(16) 前掲「乳幼児を育てる母親の学習活動の有無に影響を及ぼす学習意識」等を参照。具体的には、労力や金銭・物品、学習の場の提供のように学習活動に直接的に関係することのみならず、学習活動に関わる情報の収集・提供や相談にのることなど、それによって母親が学習活動に取り組みやすくなるようなことが含まれている。このような協力を捉える視点として、これまでの研究では以下の3側面が検討されてきている。

- ・行動面：母親の学習にとって助けや支えとなる具体的な行動
- ・意識面：母親が学習活動に取り組むことに対する肯定的な考え方
- ・情報面：母親の必要としている協力の内容を知っているかどうかということ

(17) 前掲「乳幼児を育てる母親の学習行動に周囲の協力関係が及ぼす影響」、同「乳幼児を育てる母親の学習活動の有無に影響を及ぼす学習意識」を参照。なお、これらのカテゴリーに含まれる具体的な協力主体のうち、本論文では以下2点の変更を加えている。

- 1) 「友人・知人」に含まれていた「ボランティア」を「その他の援助者」に変更。したがって、本論文で「その他の援助者」に含まれる具体的な協力主体は、「保育所や幼稚園、ファミリー・サポート・センター、ベビーシッター、ボランティアなど」である。
- 2) 「社会」について、これまでは「政府・自治体・その他公的機関」を取り上げてきたが、本論文では「学習機会の提供に関わる公的機関（学校、公民館、図書館、博物館、文化会館、体育館など）」に限定した。

(18) 協力関係の存在は、協力の3側面（行動面、情報面、意識面）のそれぞれについて、被調査者の認識を5段階（「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」）の回答カテゴリーのいずれかに回答してもらうことによって明らかにした。

(19) 前掲「乳幼児を育てる母親の学習行動に周囲の協力関係が及ぼす影響」、同「乳幼児を育てる母親の学習活動の有無に影響を及ぼす学習意識」。

(20) 前掲「乳幼児を育てる母親の学習活動の有無に影響を及ぼす学習意識」では面接調査によるデータ収集を行った。本論文における変数選択にあたっては当該調査の聞き取りの内容も参考にしている。

(21) ここでいう協力主体の種類数とは、母親を取り巻く人々・組織・機関等（「夫・パートナー」「家族・親族」「友人・知人」「その他の援助者」「社会」）のうち、協力の3側面（行動面、情報面、意識面）がすべて存在している（協力の3側面のすべてに「そう思う」「ややそう思う」との回答があった）主体の数である。

- (22) 前掲『質的比較分析』i頁(まえがき)等を参照。
- (23) これは「育児中の母親も学習すべきである」という意見に対して、被調査者に、「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5段階の回答カテゴリーのいずれかに回答してもらった。学習意識②についても同様である。
- (24) 本論文では説明変数と従属変数の間に要因が明らかになった変数のみを報告している。学習活動の有無では、そのような規定関係がみられた学習活動「なし」のみについて報告しており、第3表は学習活動「なし」の真理表である。なお、学習活動「あり」の場合には第3表とは異なる真理表となる。学習スタイルの各変数についても同様である。
- (25) ここでいう事例数は学習活動者数である。
- (26) ブール代数アプローチでは矛盾を含む場合(同じ条件でも母数が2で活動事例数が1というように、学習活動が行われる事例とそうでない事例がある場合)、区切り値(cutoff value)を設定し、従属変数の真理値を決めることができるが、区切り値を決定する絶対的な基準はない(前掲『質的比較分析』, 33頁)。そこで、今回はまず、2005(平成17)年の内閣府全国調査「生涯学習に関する世論調査」の全国の女性全体の学習活動率(50.4パーセント)を参考に、区切り値を半数を超えるかどうか(区切り値50.0パーセント)に設定し、検討した。
- (27) 変数の変数値が1の場合をアルファベットの大文字で表し、0では小文字で表す。たとえば、学習活動の有無について、学習活動を行っていない場合はY1, 学習活動を行っていた場合はy1で表される。詳細については前掲『質的比較分析』を参照。
- (28) ブール代数アプローチにおいて、式の縮約は同じ結果現象をもたらす説明変数の組合せを析出するために行われる。縮約の手続きの詳細については省略するが、式の縮約は説明変数の項を2つずつ比較することによって行われる。たとえば(i)式の右辺のABCとAbCでは、変数Aと変数Cは同じで、変数Bだけが条件の存在を表すBと欠如を表すbで異なっている。つまり、AかつCであるとき、変数Bに関してはどちらでも同じ結果現象が起きている。このことから、この場合、変数Bは結果現象に違いをもたらしていないと考えられるので、AでありCの時は、変数Bを削除し、AかつCを残す。このような手続きをすべての比較可能な項に適用する。(前掲『質的比較分析』を参照。)
- (29) 具体的には、この1年間に行った学習活動を内容ごとにみたとき、定期的に時間をとるようなものがなかった学習者の数である。

- (30) 第2行, 第3行のような事例のない行について, ドント・ケア (don't care) 項を適用すること(「縮約後の論理式に含んでも, 含まなくても, どちらでもよい」という扱いをすること)が認められている(前掲『質的比較分析』, 34頁)。そのため, 今回の検討では上記の論理式を導出する際には除くこととした。
- (31) 具体的には, この1年間に行った学習活動を内容ごとにみたとき, 子どもをあずけたことがない学習者の数である。
- (32) 第2行についてはドント・ケア (don't care) 項を適用し(注(30)参照), 上記の論理式を導出する際には除くこととした。
- (33) 詳しくは<資料2>を参照。

<資料1> 茨城県つくば市の概要と調査の結果(抜粋)

1. 茨城県つくば市の概要

つくば市は茨城県の南西部に位置し, 南北に25.4キロメートル, 東西に14.9キロメートルと南北に長い形状をしており, 大穂, 荃崎^(注1), 桜, 筑波, 豊里, 谷田部の6つの地区からなる。本市の面積は259.59平方キロメートルで, これは県内で2番目の広さとなっている。2004(平成16)年10月1日現在の人口は189,526人(男97,328人, 女92,198人), 世帯数は72,832戸である。^(注2)

市中心部には筑波研究学園都市を擁し, 2005(平成17)年8月のつくばエクスプレスの開通に伴い, 開発が進められている。一方で, 本市をとりまく自然環境は, 北に筑波山, 東に霞ヶ浦を控え, とても恵まれている。また, 筑波・稲敷台地と呼ばれる標高20~30メートルの関東ローム層におおわれた平坦な地形であり, 南北に流れる小貝川, 桜川, 東・西谷田川などの河川は, 周辺の平地林, 畑地あるいは水田等と一体になって落ち着いた田園風景を作り出している。

(注1) 2002(平成14)年11月1日に荃崎町を編入合併した。

(注2) つくば市企画部企画調整課編『統計つくば平成16年版』(つくば市, 2004(平成16)年3月)

2. 回答者のプロフィール

- (1) 学習活動者数 55 (54.5%)
- (2) 母親の職業 専業主婦: 68 (67.3%), パートタイムの勤め: 13 (12.9%), フルタイムの勤め: 11 (10.9%), 自営業, 家業の手伝い: 3 (3.0%), 育児休業中: 1 (1.0%), 内職: 1 (1.0%), その他: 3 (3.0%), 学生: 0 (0.0%)

- (3) 通算居住年数 5年未満：38 (37.6%)，5年以上10年未満：33 (32.7%)，
10年以上15年未満：5 (5.0%)，15年以上20年未満：4 (4.0%)，
20年以上25年未満：2 (2.0%)，25年以上30年未満：6 (5.9%)，
30年以上：12 (0.1%)
- (4) 子どもの人数 1人：44 (43.6%)，2人：42 (41.6%)，3人：13 (12.9%)
4人：1 (1.0%)
- (5) 末子の年齢 0歳以上1歳未満：14 (13.9%)，1歳以上2歳未満：57 (56.4%)，
2歳以上3歳未満：1 (1.0%)，3歳以上4歳未満：27 (26.7%)，
4歳以上：1 (1.0%)
- (6) 世帯構造 子ども/自分/夫・パートナー：79 (78.2%)，
子ども/自分/夫・パートナー/子どもの祖父母：14 (13.9%)
子ども/自分/子どもの祖父母：1 (1.0%)
子ども/自分：1 (1.0%)，その他：5 (5.0%)

<資料2>自由記述による「よりよい生活をおくるためにしたいこと」への回答(抜粋)
ここでは、自由記述による「よりよい生活をおくるためにしたいこと」への回答の中
から、学習スタイルおよび学習意識についての意見を抜粋して掲載した。

●学習場所・学習方法について

・現段階では、自宅で学習できるものを選ぶ。(2) ・外に出ることは難しいと思う。(1) ・外に出ることが必要だと思う。(2)

●学習中の子どもの世話、託児に関して

・実際に子どもをあずけて学習している。(2) ・子どもをあずけて学習したい。(4)

・子どもをあずけて学習したいが、難しい。ためらいがある。(3)

・子どもをあずけて学習したいが、あずけるところがない。(2)

・子どもをあずけてまで学習したいとは思わない。(1) ・お金を払ってまで子どもを預けたいとは思わない。(1) ・託児サービスが利用しにくい。(2)

・子どもが一緒だと学習しにくい。(1) ・一緒に学習できるものを選びたい。実際そのようにしている。(1) ・子連れで参加できるような学習機会がよい。(3)

●時間について

・子どもとの時間を大切にしたい。(4) ・生活が子ども中心にならざるを得ない。(1)

・子どもと過ごす時間を大切にしつつ、自分のために使う時間も確保したい。(1)

・学習したいが今はあきらめている。(1) ・自分のために使える時間がほ

しい。(6) ・時間を捻出するのが難しい。(5) ・日常生活の空き時間を利用したり周囲の協力を得て学習時間を確保する。(3)

●その他の記述

・学習経費の問題(3) ・周囲の理解が十分ではない。(2) ・母親の学習活動に対して否定的な意見がある。(2) ・周囲に負担をかけていると思うが、学習を続けたい(1) ・家族形態について(核家族では学習活動に取り組むのは難しい)(1)

※ () 内の数値は同様の回答があった回答者数である。